

## 第Ⅰ章 ギリシア神話の言葉——ミュートス——

よく知られるように、ギリシア語で「神話」を表す言葉は、ミュートス (mythos) ないしミュートロギアー (mythologia) である。それぞれ、英語の myth および mythology にほぼ対応し、一般に前者は個別の物語を指し、後者は体系としての神話あるいは神話学というような総称的な用いられ方をする。こうしたミュートスの語義がはっきりと現れてくるのは、プラトーン以降であるように思われる。そして、プラトーンではしばしば、ミュートスはロゴス (logos) と対比される。

### 1 プラトーンの場合

プラトーンは『ゴルギアース』の結びで、ソークラテースに冥界での裁きについての物語を語らせている。この物語について、対話者のカッリクレースに向かって、ソークラテースは次のように前置きする。

では、聞きたまえ、よく人が言う、とても美しいロゴスだから。それを君はミュートスだと考えるだろう。そう僕は推察する。しかし、この僕はロゴスだと考えるんだ。というのも、真実のことなんだ、これから君に話すのは。本気でそう思つて話すんだ。

〔「ゴルギアース」五二三A〕

また、『バイドーン』では、刑死を前にしたソークラテースが、それまで手を着けなかった詩作を始めたことをめぐつて、次のように語る。

詩人は、もし本当に詩人であろうとすれば、ロゴスではなく、ミュートスを作らねばならない。僕は物語作者ではないのだから、手近にあつて僕がよく知っている物語、つまり、アイソポス「イソップ」の物語を取り上げ、それらのうちで最初に思いついたものを詩に直したのだ。

〔「バイドーン」六一B〕

さらに、『国家』において、子供たちの教育対話の議論が及んだ箇所では、

ソークラテース ロゴスには二種類あり、一つは真実、もう一つは虚構ではないか。

グラウコン そのとおりです。

ソークラテース 教育は両方をもつて行うべきだが、虚構を用いるほうが先ではないか。  
グラウコン どうしてそう言われるのか分かりません。

ソークラテース 分らないかね。私たちが最初に子供たちに語るのはミュートスだろう。これはまあ、総じて言えば虚構だ。中には真実もあるけれど、私たちは子供たちに体育より先にミュートスを用いるのだ。

〔「国家」二・三七六E—三七七A〕

と語られる。

これらの例では、ミュートスが虚構であるのに対し、ロゴスは真実だと信じられる物語の意味で用いられている。とくに、『国家』の用例では、ミュートスのほとんどが子供向けのおとぎ話であるようにも言われている。しかし、この対比においては注意しなければならないことがいくつかある。

第一には、いずれも言葉による「物語」を表すという点では同じ、ということである。というのも、ロゴスは「理性」、「論理」(cf. *Logos*)を意味することから、ときとして、この対比においてミュートスが非理性的あるいは非論理的傾向を有するかのような理解が行われることがある。しかし、このような理解が不適切であることはすぐに了解される。物語とは、始まりから終わりまで一定の筋道を追って展開するものである。その筋道は「理」にはかならない。そもそも、言葉には必ず意味があり、意味が通じるためには、そこに理が存在する。実際、プラトーンにおいても、「物語」あるいは「言葉」という意味でミュートスとロゴスとの差異がほとんど認められない例が見受けられる。たとえば、右に『国家』から引用した箇所直前には、

さあ、では、あたかもミュートスに浸ってミュートス語りしつつ余暇を過ごすかのように、ロゴスを用いてわれわれはこの人々を教育しよう。

(同二・三七六D)

とあり、ミュートスとロゴスはともにこれから行われる議論を指している。また、

われわれがロゴスを用いてミュートス語りしている国家

(同六・五〇一E)

という表現では、ロゴスとミュートスの意義は完全に重なり合っている。さらに、ティーマイオスが、

宇宙と神界について完全な説明の不可能性を述べて、

われわれはこれらのことについて妥当なミュートスを受け入れ、もはやそれ以上に何物も探求しないことが相応である。  
〔「ティーマイオス」二九D〕

と言うとき、ミュートスは「合理的な言葉」の意味で用いられている。

第二に注意すべきは、ミュートスとロゴスを分けている「真実」の本来の意義である。「真実」を表すギリシア語のアレーテイア (alētheia) は、「忘却」を意味するレーテー (lethe) に否定の接頭辞であるア(レ)が付加して出来ている。つまり、「忘れてはならないもの」、古来伝え聞いて「記憶にとどめるべきもの」が「真実」である。この本義はプラトーンの最初に挙げた二つの例にも生きている。というのも、『ゴルギアース』では、ソークラテースが彼のロゴスを語り終わったあと、

このようなものなのだ、カッリクレースよ、これが僕の伝え聞いて真実と信じていることなんだ。  
〔「ゴルギアース」五二四A〕

と締め括り、昔からの言い伝えであることを示している。また、『パイドーン』の例では、「詩人」を表すギリシア語ポイエーテースの原義がこの点に関連している。すなわち、ポイエーテースは「作る人」という意味であるから、詩人の語るミュートスは詩人によって新たに作り出されるものを意味する。対して、ソークラテースは彼が伝え聞いて親しみのある物語に依拠する、と語られている。

さらに、『パイドロス』には、

パイドロス 教えてください、ソークラテースよ。このあたりのどこか、イーリツソス川からではなかったですか、「北風の神」ボレアースがオーレイテユイアをさらったと言いつたといふ伝えているのは。

ソークラテース たしかに、そういう言い伝えだ。

パイドロス では、このあたりではないですか。だって、実に美しく清らかで透き通って見える水の流れていますから。娘らがほとりで戯れるには格好です。

ソークラテース いや違う。下流に二ないし三スタディオンほど行って、アグラの社への渡し場があるところだ。そのあたりにはまたボレアースの祭壇というのもある。

パイドロス 私はこれまでまったく気づきませんでした。でも、教えてください、お願いします、ソークラテースよ。あなたはこの神話が真実だと信じますか。

ソークラテース まったく私が信じないなら、知恵のある人たちと同じく、流行遅れにもならないだろう。それで、知恵があるように見せて、彼女はパルマケイアと遊んでいるときに、北風ボレアースの息で近くの岩から突き落とされた、こうして落命したことがボレアースによってさらわれたと語られるようになった、とも言うだろう。だが、パイドロスよ、この私はそうした説明を見事だとは思ふ。しかし、それは才がありあまって労苦も辛抱でき、それに、まったく幸せとは言えない人のすることだ。なぜと言って、実に、そういう人はこの話のあとにはヒッポケンタウロスたちの姿を正しく直し、次にキマイラたちを片づけると、さらに群れなすゴルゴーンやらペーガソスやら他の手に負えぬもの、また、多数の奇妙な、驚異の生き物が押し寄せるといふ仕儀に陥る。

という有名な対話が見られる。ここでソークラテースが神話に対して示している態度は、いかに荒唐無稽な話でも、確かめようのないことは真実でないとも確かめられない、というものである。

加えて、『ゴルギアース』や『バイドーン』と同じく『国家』においても作品の結末部に冥界についての物語が置かれているが、この物語を語り終えたあと、ソークラテースは、

グラウコーンよ、こうしてミュートスは救われ、消え去りはしなかった。それはわれわれをも救うだろう、もしわれわれが信じるならば。われわれはレーターの川を立派に越えるだろうし、魂に汚れをもつこともないだろう。

〔国家〕一〇・六二一C—D)

と言う。物語は死後の世界を見たあと蘇生したエルという人物の体験談であり、それをソークラテースはエルから聞いたという体裁を取っている。エルの物語はソークラテースが伝え聞き、語り継ぐ（さらに、プラトーンが書き記す）ことで、「救われた」。そのようにして、ソークラテースがレーター、つまり忘却の川を越える、と言われるとき、ミュートスは忘れ去られることのない「真実」を含むように思われる。

この「ミュートスの救済」にも窺われるように、注意すべき第三点は、ソークラテースあるいはプラトーンが述べるところは当時の一般的理解とは異なる、あるいは一般的認識の見直しを行っているらしい、ということである。

『ゴルギアース』では、カツリクレーヌがソークラテースの物語をロゴスではなくミュートスと考えようだ、と言われていた。つまり、ソークラテースは一般に考えられるところとは違う見方を提示しようとしている。

また、「バイドーン」では、引用箇所先立って、最高のムーサの技術としての哲学と通俗的なムーサの技術とが区別されている。「ムーサの技術」は通俗的には音楽や詩作を意味するのに対し、ソークラテースは哲学がその最高のものだと思っていた。ために、夢のお告げで、「ソークラテースよ、ムーサの技術を行え」と言われたのをこれまでは哲学への勧めだと信じていたが、いま死ぬ前に少し思い直した。これが引用箇所にいたるくだりで、ここでムーサの技術について「最高」と「通俗的」と二種類があるなら、これと密接な関係にあるミュートスについてもそれに似た区別があるように想像される。

さて、これまで見てきたことをまとめておこう。プラトーンは、ロゴスが真実の言葉・物語であるのに対し、ミュートスは虚構であるとして区別している。しかし、ロゴスもミュートスも言葉・物語という点では違いがない。論理的と非論理的という対置は不適切である。区別のポイントである「真実」の本義は「忘れてはならないこと」である。その本来の意味で真実の、つまり忘却の闇に消え去らないミュートスもある。

以上のことは、ミュートスについて観察の目を口承伝統に向けるべきであることを示しているように思われる。というのも、「真実」が「忘れてはならないもの」であるということ、文字に記されて伝えられるときよりも、口承伝統においてはるかに差し迫った意味をもつからである。そこでは言葉・物語は肉声のみで伝えられる。肉声は文字のような形をもたず、発せられた瞬間だけ存在し、その場限りで消えてゆく。そのような媒体に託されたものは、繰り返し語り継がれなければ、時間の経過に負けて忘れ去られてしまう。逆に言えば、世代を越えて記憶にとどめられるものには、それだけ忘却に抗する力がある。この力が備わったものを「真実」と呼ぶことは、きわめて当然のようにも思われる。このことを念頭に、次には、ホメーロスの叙事詩におけるミュートスの意義について見てゆくことにする。

## 2 ミュートスとエポス

ホメーロスの叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』において、ミュートスは「言葉」ないし「話」という意味で用いられている。ホメーロスでは、ミュートスと意義の重なる語として、ロゴスの用例が非常に少ない<sup>(3)</sup>一方、エポス (epos) が用いられている。ホメーロス以後、ミュートスが「物語」の意味を強めるのに対し、エポスは文学ジャンルとしての「叙事詩」を表す用語となった。ホメーロス、とりわけ『イーリアス』におけるエポスとミュートスとの差異は、ほぼ次のようなところにあると認められる。<sup>(4)</sup>

ミュートスは、それをもって語りかける人物が相手に働きかけを行う言葉であり、語りかけた人物に十分な権威があるとき、行為として実現される言葉と考えられる。それに対して、エポスは、言ってみれば、中性的な言葉（この名詞は実際に中性名詞である）で、行為の結果、あるいは、事柄があるがままに記述するような言葉である。ミュートスを能動的、当事者的とするなら、エポスは静的、第三者的と言つてもよいかもしれない。

一つ例を引こう。『イーリアス』はトロイア戦争の十年目を舞台にし、英雄アキッレウスの「怒り」を主題にしている。その発端は大将アガメムノーンがアポッロン神の祭司クリューセースをあしざまに扱ったところにある。というのは、そのためにクリューセースの祈願を受けたアポッロン神が悪疫をギリシア軍に送り多数の死者が出たことへの対処をめぐってアガメムノーンとアキッレウスが衝突、ギリシア軍きつての勇士アキッレウスが激しい怒りを抱いて戦線を離脱、その結果、ギリシア軍が多大な苦難を蒙ることになるからである。クリューセースは自分の娘クリューセーイスをアガメムノーンの



もとに捕らわれていた。そこで、身代金を携え、定式の装いをして、ギリシア軍の全員の前で娘を返すように嘆願する。ところが、他の全員が身代金を受け取るよう言ったにもかかわらず、

アトレウスの子アガメムノーンにはこれが気に入らず、手荒く祭司を追い返し、乱暴な言葉「ミュートス」で命令した。「老人よ、おまえの姿をこの私がうつろな船のそばで見ることのないようにしてくれ。いまうろろするものも、また出直すのもいかん。さもないと、笏杖しやくじょうも神の標しるべもおまえを守ってはくれぬぞ。娘をこの私が返すことはない。それより先に彼女には老年がやってくる。われわれの家があるアルゴスの地で、祖国から遠く離れ、機織り仕事をし、私の臥床の世話をするのだ。さあ、行け。私を怒らすな。そうしたほうが無事に帰れるというものだ」。アガメムノーンがこう言うのと、老人は恐れを抱き、その言葉「ミュートス」に従った。

〔イーリアス〕一・二四―三三

このあとで、クリューセースがアポローン神に祈願して、悪疫がギリシア軍を襲うことになる。ここでミュートスはアガメムノーンの言葉を指す語として使われている。「乱暴な」に当たるギリシア語の形容詞クラテロスの本義は「力の強い」であり、そのとおりに強力な権威をもってアガメムノーンの命令は発せられている。これに従ったのは、恐れを感じたクリューセースだけではない。クリューセースの嘆願の直後には、「賛意を示して、祭司への表敬と見事な身請け料受納とをなすよう叫んだ」(同一・二二―二三)ギリシア軍の全員もこれに従った。それゆえ、アポローンが送った悪疫は、アガメムノーン一人ではなく、ギリシア軍全体を苦しめることになる。

このようにアガメムノーンの発したミュートスは大きな権威をともなっている。この場合、ミュート

スは「命令」という形をとり、これには誰にも抗しがたい力がある。こうしたミュートスによる発言者から聞く者への強い働きかけは、「命令」のほか、「諫止」「叱責」あるいは「説得」といった形で現れる。

場面は少し進んで、『イーリアス』第四歌、ギリシア軍とトロイア軍がいざ戦闘開始というとき、アガ멤ノーンは戦列の各所を閲兵して回る(同四・二三二以下)。彼がオデュッセウス率いるケパレーネス勢らのところへとやってきたとき、将兵がじっと立っていた。そこで、

彼らの様子を見て、人々の王アガ멤ノーンは叱りつけた。彼らに呼びかけ、翼ある言葉を投げつけた。「ゼウスが養う王ペテオースの息子よ、それにおまえ、悪辣な策略に長け、利得に聡い者「オデュッセウス」よ、どうしておまえたちは腰の引けた構えで離れて立ち、他の者たちの出方を待っているのか」。

(同四・三三六—三四〇)

しかし、この叱責に対し、オデュッセウスがまったくいわれのないことだと抗弁すると、

彼に、アガ멤ノーン王はにやりと笑って言った。彼が腹を立てたのを認めたからで、自分の言葉「ミュートス」を撤回した。「ゼウスの血を引くラーエルテースの子、機略に富むオデュッセウスよ、おまえに私が行き過ぎた叱責や命令をすることはない」。

(同四・三五六—三五九)

と前言を翻す。ここでは、アガ멤ノーンの叱責について、「翼ある言葉」(エペア・プテロエンタ)という表現とミュートスとが使われている。「翼ある言葉」は、エポスの複数形であるエペアに「翼ある」という修飾語プテロエンタがついた定型句であり、ホメーロスの叙事詩に繰り返し現れる。その本来の

意義については議論が分かれるが、少なくともこの例では、アガ멤ノーンの叱責を指す点で、ミュートスとは同じ意義で用いられている。このことは、右に触れたミュートスとエポスの相違を考えるうえで示唆的である。叱責という言葉の強さを表すのにミュートスは一語で十分であるのに対し、エポスは「翼ある」という意味を強化する付加語を必要としている。エポスだけでは中性的、静的であるが、「翼ある」という語が加わることで能動性を帯びることになる。

さて、第一歌の場面に戻ろう。アポッロンがギリシア軍に送った悪疫に対し、アキッレウスの發議により全軍の會議が招集され、予言者カルカースの口から悪疫の原因はアガ멤ノーンがクリューセースに加えた恥辱であることが述べられる。しかし、アガ멤ノーンは素直に承知せず、クリューセースを返すなら代償が必要だ、と言う。それをアキッレウスが非難すると、アガ멤ノーンは、アキッレウスのもとにいる女ブリセイイスを代わりにもらう、とまで言う。激昂したアキッレウスは劍を抜いて斬りかかろうとする。が、そこに、女神アテーネーがアキッレウスにだけ姿が見えるように現れる。アキッレウスは、

女神に呼びかけ、翼ある言葉を投げつけた。「どうしてまた、アイギスもつゼウスの娘なるあなたが出来てきたのか。アトレウスの子アガ멤ノーンの非道を見るためか。いま私のはつきりと告げることは必ず成就するはず。あの男は自分の傲慢がためにすぐにも命を失うでしょう」。

(同・二〇二—二〇五)

この言葉に応える形で女神は言う。

「私がやってきたのはおまえの激情を止めるため。おまえが言うことを聞いてくれようかと、天から降りてきた。私を遣わしたのは白い腕の女神ヘーラー、おまえたち二人を同じように愛し氣づかっている方だ。さあもう争いをやめよ。剣に手をかけるな。言葉「エポス」で罵るがよい。どういことが待ち受けているか言つてやるのだ。いま私がしっかりと告げることは必ずや成就するであらう。三倍もの見事な贈り物が、おまえのもとに届くであらう。」（同一・二〇七—二二二）

この女神の諫止の言葉を聞くと、アキツレウスは、

「女神よ、あなたがたお二人の言葉「エポス」は胸にとどめておかねばなりません、どれほど心が怒りにふかれていたとしても。そのほうがよいのです。神々の言うことを聞く者には、神々も耳を傾けるのですから」。彼はこう言つて、銀の柄つかにかけて手を止め、大剣を鞘の中へと戻した。アテーネーの言葉「ミュートス」に従わずにはいなかった。

（同一・二二六—二二二）

ここで、最初に女神に対して言われたアキツレウスの言葉にも、どうしていま余計なことをするのか、という非難めいた強い響きがある。が、このアキツレウスの「翼ある言葉」の力をすっかり押し止めてしまうのがアテーネー女神の諫言であり、これがミュートスとされている。

そのアテーネーとヘーラー両女神の言葉をアキツレウスが胸にとどめるとき、それはエポスとされる。すでに女神たちの言葉はアキツレウスへの働きかけを終え、心の中にしっかりとめられた状態であり、その静的な状態がエポスと言われている。また、女神がアキツレウスに「言葉で罵る」ように勧めるとき、これにもエポスという語が用いられる。それに対応するように、このあとアキツレウスがア

ガムムノーンに「災いを呼ぶ言葉で」（同一・二二三）罵るとき、この言葉もエポスとされる。この面罵は、アキツレウスの不在がギリシア軍に災いとなり、アガムムノーンはアキツレウスを辱めたことを後悔するであろうことを誓言の形で述べて結ばれる（同一・二二五―二四四）。しかし、ここでのアキツレウスの言葉には、アガムムノーンに斬りつけようとしていたときの迫力はない。剣に訴えることをやめたあと、つまり英雄の力の挽り所を放棄したあとの言葉である。実際、このアキツレウスの言葉に対する誰のいかなる反応も、ホメーロスは叙述していない。ここでのアキツレウスの誓言はそれとおりに成就するが、いまこの場においてはどのような行為も実現しない。それゆえに、この言葉はミュートスではなく、エポスと言われるのだと考えられる。

さて、アキツレウスがアガムムノーンに対する罵りの言葉を吐いたあと、二人の睨み合いで場面の動きが止まる。そこに、ギリシア軍中一番の長老ネストールが仲裁に立つ。

「さあ、おまえたち、私の言うことを聞け。おまえたちは二人とも私より若い。かつてこの私はおまえたちにすら優る人々と一緒に過ごしたが、彼らは私を決して軽んじはしなかった。あれほどの勇士たちを私はかつて見たこともなく、これからも見ることはなからう。ペイリトオスに軍勢の牧者ドリュアス、カインェウスにエクサディオス、また神のようなポリリュペーモス、さらにはアイゲウスの子、神にも似たテーセウスというような者たちだったのだから。あの者たちこそ大地が育んだ人間のうちでも最強であった。最強であつたうえに、最強の者ども、山に棲む獣人「ケンタウロス」どもと戦つて假借なく滅ぼした。この人々の仲間はこの私も連なつた。ピュロスからやつてきたのだ。遠く離れた国ではあるが、彼ら自身が私を呼んだのだから。戦いするとき私は私のやり方

をした。しかし、あの者どもが相手では、いま大地に暮らす人間の誰一人として戦うことはかなうまい。さて、この私の意見には彼らも耳を傾けた。私の言葉「ミュートス」に従ったのだ。さあ、おまえたちも従え。従うほうがよいのだから。」

(同一・二五九—二七四)

ここで老雄ネストールが引き合いに出しているのは、トロイア戦争の英雄たちより一世代前の英雄たちの神話で、ペリトオスを王とするラピタイ人が半人半馬のケンタウロスの一族と争ったという物語である。この戦いにネストールが参加したという伝承は、ほかに知られていない。また、彼がラピタイ人に加勢しながら、「戦いるとき私は私のやり方をした」と言うのも、どういふことなのかよく分からぬ。しかし、どのような戦いであつたかは、ここでは問題ではない。そうした無類の強者たちにネストールは自分の言うことを聞かせたことがある、それだけ自分の言葉には権威がある、ということがポイントである。そして、この強者たちを従わせた言葉がミュートスであつた。このミュートスにかつて最強の勇士たちが説得されたように、いまアガメムノンとアキッレウスも自分の言葉に従え、とネストールは言う。つまり、かつてのミュートスがいまのネストールの説得に権威を与えるように意図されている。この権威づけによつて、ここでの彼の説得の言葉もミュートスであることが言外に示されていると思われる。とすれば、ネストールのミュートスは二人の英雄に対する説得として二重の働きかけをなしている。一方で自分の説得力に裏づけを与えながら、つまり、自分の説得に従うことが正当であることを説得しながら、同時に、それにもとづいて、諍いをやめるように、と説得しているからである。

## 3 ミュートスと想起

さて、ミュートスによる発言者から聞く者への強い働きかけとして、「命令」、「諫止」、「叱責」、「説得」といった例を見てきたが、ホメーロスにおけるミュートスと神話との関連という観点から関心を引くのは、ネストールによる説得の言葉であろう。話の中にいわゆる「神話」が引かれ、これがミュートスの説得力の裏づけを与えているからである。

このネストールが登場するとき、ホメーロスは次のように紹介する。

彼ら「アキッレウスとアガ멤ノン」の前にネストールが立ち上がった。言葉は心地よく、弁じる声は鋭い、ピュロス生まれの士で、その舌からは蜜よりも甘い響きが流れ出る。彼のもとですでに二世代の人々が滅び去っていたが、これは昔、彼と一緒に聖地ピュロスで生まれ育った者たちであつた。このとき彼は第三の世代を統治していた。〔イーリアス〕一・二四七—二五二

ここで、ネストールの雄弁は彼の並外れた長生きと一体であるかのように語られている。実際、彼がラピタイ人やケンタウロスの一族のことを語れるのも、長生きであればこそと言える。彼の説得力の源の一つは、他の誰よりも古く過去に遡って昔のことを体験から語れるという点に認められる。つまり、ネストールに見るかぎり、昔を思い起こす力がミュートスの説得力に通じていると思われる。

ただし、ネストールが語る昔のことは、ネストールしか知らないものであろうか。というのも、ラピタイ人とケンタウロス一族の戦いを知っていたのはネストールだけかという点、そうとは考えられないからである。ネストールはラピタイやケンタウロスという名前すら語らない。そもそも話全体がきわ

めて簡略にしか言及されていない。それでいて、アガ멤ノンもアキッレウスも、他のギリシア軍將兵も、そして、おそらく「イーリアス」の聴衆も、誰もがこの物語だと了解できた（そうでなければ、この場面は成り立たないであろう）。その理由は、これが知らない人のない有名な物語であり、聞く人すべてに一定の予備知識が備わっていることにあると考えるのが妥当である。

同様のことは、右に触れた第四歌でのアガ멤ノンによる將兵の閱兵場面にも見られる。アガ멤ノンがネストールのところへやってきたとき、ネストールは「この私も願わくば、自分がかつて神のようなエレウタリオンを斬り倒したときのようにであればよいと思う」（同四・三一八—三一九）と言ひ、そこにはエレウタリオンについてそれ以上の説明はない。ネストールとエレウタリオンの一騎打ち、そこでのネストールの活躍がよく知られた物語であることが、この場面での彼の言葉の前提をなしていると考えられる。

ところが、ネストールは第七歌で、トロイアの総大将ヘクトールがギリシア側に全軍を代表する一騎打ちを呼びかけたにもかかわらず、受けて立つ者がすぐに出なかつたとき、このエレウタリオンとの一騎打ちにもう一度言及する。

「私が若かつたらよいのに。あの頃、流れの速いケラドーン河畔の戦いに、ピュロス軍と槍の手練れのアルカディア軍とが集まつた。ペイアの城壁のもと、イアルダノス川の流れをめぐつてのものだつた。アルカディア軍にはエレウタリオンが先頭に立つた。神にも似た勇士で、両肩にアレイトオス王の武器をまといつていた。〔中略〕この武器をまとい、彼はすぐれた勇士のすべてに戦いを挑んだ。ところが、震えを覚え、恐れを感じた彼らは誰一人勇気を奮い起こせなかつた。しかし、



この私は不屈の意気込みで戦いへと向かった。意地があつたのだ。生まれではすべての者の中で一番若い私であつたが、かの者と私は戦い、アテーネー女神は私に榮譽を授けた。私が倒したもつとも大きく強い勇士で、大きいあまり、身を左右に広げてのびていた。あのように私が若く、私に変わらぬ力があればよいのに。であれば、すぐにきらめく兜のヘクトールも戦いの相手を見つけれよう。」

(同七・一三三—一三七、一五〇—一五八)

ここでは、ほとんど内容に触れない第四歌とは異なり、その次第がやや詳しく語られるという違いが認められる。物語そのものは同じであるから誰もがよく知っていることには変わりがない。語り方の違いは第四歌と第七歌の状況の違いに対応している。第四歌では、閲兵するアガメムノーンのねぎらいに答えるためであつたから、エレウタリオンを倒した青年時代への言及だけで十分であつた。対して、第七歌では、彼がかつて戦つた一騎打ちと目前の対ヘクトールとの戦いにより細かな対応がある。すなわち、敵の大将の勇ましさに誰もが怖<sup>おそ</sup>気づく中で不屈の勇氣が必要とされるといふ状況であり、その類比を示すためにネストールはここで物語をより詳しく語っている。

そこで、ネストールの話は、このような目前の状況との関連性に注意を喚起するところに主眼があることが認められる。実際、第一歌のアキッレウスとアガメムノーンの仲裁場面でも、ネストールにとつて肝要なのは二人に自分の言うことを聞かせるということであつた。そのため、本来なら物語の中心であるべき戦いには簡単に触れるだけで、自分の言葉に名だたる勇士たちが従つた、というポイントが強調された。

このことから、先に、ネストールについて昔を想い起こす力がミュートスの説得力に通じていると述

べたが、この「想起」には、ネストール自身が遠い過去を思い出すというにとどまらない、もう一つの側面のあることが分かる。ネストールが語る話は聞いている人々も知識として知ってはいる。が、知っている話であつても、それがいま目の前の事柄と関連があることに気づくとは限らない。ネストールは、その過去の物語の中の「いま」に結びつく部分へと人々を導く。ネストールの物語につき随うことで初めて、聞いている人々は自分の知識の中から現在に必要な要素を想起することができると言つてもよいから、ネストールの説得は「想起」という形で聞く人に働きかけるミュートスである、と言つてもよいかもしれない。

さて、この想起を促すネストールの説得について裏づけを与えるのは、すでに触れたように、彼の直接経験である。並外れた長生きゆえに、他の者が体験しえない過去の事柄をネストールは自分の目で見てゐる。このことは彼の言葉に一定の権威を与える。ほかでもない彼自身が、彼が語り聞かせることの生き証人だからである。実際、『イーリアス』を通じて、説得のために引かれる物語のほとんどが、話者の直接経験にもとづいてゐる。<sup>5)</sup>

このように直接経験により説得あるいは語られる内容に権威づけがなされることは、ある類比関係を連想させる。それはムーサと詩人ないし歌人との関係である。本書のはじめにも触れたように、歌人がムーサ女神に呼びかけて加護を乞うのは、歌おうとする事柄のすべてを歌人は知りえない、とりわけ、時間的にも空間的にも遠い世界について直接の体験がないからである。そこから、自分の歌うことに間違いがないとするために、ムーサから教えを受けたという裏づけを必要とする。これは、語る者自身の直接見聞にそれだけの権威が認められていることの裏返しと言える。つまり、当事者が自分の言葉で語るとき、ミュートスの力が生まれている。それをもたない歌人はムーサ女神に依存しなければならな

い。が、このことは見方を変えたと、歌人はムーサから直接経験の代替物、あるいは、限りなく現実に近い仮想体験を授与されており、それがネストールのように権威をもつて語ることを可能にする、と考えられるかもしれない。

#### 4 ミュートスと例話

さて、ネストールの場合に見るような、説得などに際して引き合いに出す物語は、形式の点で、本書のはじめにも触れたように「範例」ないし「例話」と呼ばれる。この形式は、ホメーロス以降も、ギリシア・ラテンの古典文学において、ジャンルを問わず神話を地の文に挿入する装置として用いられることになった。こうした例話は、とりわけ神話の登場人物の口から話されるとき、生の形でギリシア神話が語られているように見える。神話の世界の中の事柄が直接そこで物語られているからである。しかし、ここで注意しなければならないのは、ネストールが自分の体験を語るかぎり、それはネストールにとっては「神話」ではなく、自分がそこに立ち会った確固たる事実だということである。それが強い説得力を生み、それによって聞き者を動かす言葉がミュートスと言われている。『イーリアス』において神話とミュートスが異なるのはこの点である。

しかしながら、『イーリアス』の中には、自分の直接体験ではない神々の世界のこと、あるいは、昔の物語を語っていないながら、その説得の言葉が翼ある言葉ないしミュートスと言われている例も見られる。それは第二四歌でのアキッレウスの場合である。そこに語られる物語においては、ミュートスが体験された「事実」から聞き伝えられた「話」へと比重を移すことにより、「神話」にきわめて近づくように見える。

アキッレウスは、親友パトロクロスが自分の身代わりに戦場に出て敵将ヘクトールに倒されたことから、親友の復讐のため戦線に復帰、ヘクトールを討ち果たす。それでもなお英雄は怒りがおさまらず、ヘクトールの遺体をさんざんに痛めつける。が、第二四歌、息子ヘクトールの遺体返還を嘆願するために、トロイアの老王プリアモスが神の導きにより単身アキッレウスの陣屋を訪ねる。「父上のことを思い起こしてくれ、神々にもよく似たアキッレウスよ、父上も私とちょうど同じ年の頃、老年の厭わしい敷居に立っているはず」（『イーリアス』二四・四八六—四八七）と始まる老王の嘆願の言葉はやはりミュートス（同二四・四八五）と言われ、アキッレウスの心を動かす。老王と英雄は二人して、一方は息子を、他方は父ペーレウスと親友とを思つて涙を流し合う。そして、ヘクトールの遺体を返す用意を終えたあと、アキッレウスはプリアモスに食事を勧め、このときニオペーのことを引き合いに出す。この例話を含むアキッレウスの言葉が、ミュートス（同二四・五九八）と言われている。

「髪美しいニオペーですら、食事のことを思い起こした。彼女は十二人もの子供を屋敷の中で殺されたのだ。六人は娘で六人は若さ溢れる息子たち。息子たちはアポローン神が銀の弓で、娘たちは矢を降らす女神アルテミスがニオペーへの怒りから殺した。というのも、彼女は頗美しいレートー女神と張り合つたからだ。女神の子は二人だけだが、自分は大勢産んだと言つたのだ。そのため、二人の子「アルテミスとアポローン」は二人だけで、大勢の子すべてを滅ぼして去つた。その遺体は九日間、血まみれのまま横たわっていたが、誰一人葬る者がなかった。住民をクロノスの子「ゼウス神」が石に変えてしまったからだ。それでも、十日目に天空の神々が埋葬してやった。このニオペーも食事のことを思い起こした。流す涙に疲れ果てたのだ。いまではどこか岩の上、人の通

わぬ山の上、シピュロスの山上にいる。人づてに、そこには女神たち、アケローオスの河のほとりに舞うニンフたちの臥床があるというが、この地で石となりながら、神々の送った悲運を噛みしめている。」

(同二四・六〇二—六一七)

この中に出るシピュロス山というのはトロイアの南のリューディアにあり、ニオペーはこの地域を治めた王タンタロスの娘であった。彼女はテーバイの城壁を築いたアンピローンと結婚したとされる。タンタロスの息子、つまりニオペーの兄弟であるペロプスがアガ멤ノーンの祖父に当たるので、ニオペーはアキッレウスより二世代、あるいはそれよりさらに以前に生きていた、ということになる。そこで、アキッレウスはニオペーのことを直接には知りえない。アキッレウス自身の言葉に「人づてに」とあるとおりである。ひよっとすると、老王プリアモスのほうがよく知っている話であるかもしれない。しかし、その言葉は強い働きかけを示す。アキッレウスは、この言葉を語ったあと、ただちに立ち上がった。銀色の羊を屠った。そして、部下の者たちが手伝って食事が用意され、一同がこれを食する。プリアモスがアキッレウスの言葉に従った、というような叙述もなされない。部下も含め、その場で聞いている者の誰の反応も待つ必要がないほど、文字どおり、有無を言わせぬさまを表すようである。

また、この場面には伏線があつて、プリアモスの嘆願ののち、二人が涙を流し合つたあと、一度、アキッレウスはプリアモスに落ち着いて座るように勧める。

「さあ、椅子に腰をおろすがよい。苦痛はあつても心の内にしまつておこうではないか、いくら辛かろうとも。何一つ生まれてはこないのだ、凍るような嘆きからは。それが、哀れな人間たちに、神々の紡いだ運命、辛い思いで生きろと言う。しかし、神々自身にはなんの思い煩いもない。ゼウ

ス神の館には二つの大瓶がしまつてある。贈り物を入れた大瓶で、一方には災いが、他方には幸せが入っている。雷電を喜ぶゼウスがこれらを混ぜて授けた人間は、あるときは不運に遭い、あるときは幸運を得る。痛ましいものばかりを授かった人間は、恥辱にまみれ、悪しき飢餓によつて聖なる大地の上を追い回される。流浪の身で神々からも人々からも見捨てられる。そのようにペーレウスにも、神々は生まれたときより見事な贈り物を授けた。というのも、福でも富でもすべての人間を凌駕し、ミュルミドネス人の王となつた。そのうえ、死すべき身でありながら、女神を妻とした。しかし、その父にも神は災いをもたらした。館の内に王となるべき息子たちが生まれず、たった一人もうけた息子も命短い悲運の定め。この私には年老いてゆく父の世話はできない。これほど遠く故国から離れたトロイアの地に居座り、あなたと子供たちを悩ましているのだから。」

(同二四・五三—五三三)

ここでも、神の館にある幸福と不幸の二つの瓶という例話が用いられる。よく似た神話に「パンドラの箱」というのがある。ヘーシオドスが語るところでは、災いが入つた大瓶の蓋をエピメーテウスの妻パンドラーが開けてしまい、災いがすべて世界中に飛び出していき、瓶に残つたのは希望だけだった(『仕事と日』四二—〇五)、という有名な話である。そこで、ここでの二つの瓶の例話もよく知られた話であつたことが想像されるが、神々の世界のことであり、アキッレウスの直接見聞でないことはオオベアの物語の場合と同様である。そして、いつとき悲嘆をおさめよう、という例話の主旨も共通している。

ところが、この例話を含むアキッレウスの言葉(『翼ある言葉』)『イーリアス』二四・五一七)と言われて

いる)に對し、プリアモスは息子の遺体返還を早くしようと求め、これを斥ける。すると、アキツレウスはプリアモスを睨みつけて、すべては神々の導きによるものと自分は知っており、遺体は返すから、いまは自分を怒らすな、という旨を述べる。これに老王は恐れを覚え、その言葉(ミュートス)に従つた(同二四・五七二)と言われる。そこで、アキツレウスは二人の従者と遺体返還の支度を整え、これがすんで右に引いた食事を勧める場面となる。

アキツレウスによる、それぞれ例話を用いての類似した主旨の二つの勧めに對して、プリアモスは、最初はすぐに納得せず、あとのほうでは一も二もなく従つた。その違いについてここで詮索することはしない。が、まず、二度ともアキツレウスがプリアモスに言うことを聞かせたことは同じであり、その点で、いずれもミュートスの働きを發揮しているのは確かである。また、プリアモスが従つたのが、ただアキツレウスを恐れるがため、つまり、必ずしも例話の説得に納得したうえでのことではなかつたとしても、そうしたことはプリアモスにとつても好ましい結果を生む。すなわち、食事のあと、プリアモスは次のように言う。

「いまはすぐにも私を横にさせてくれ、ゼウスの養う方よ。すぐにも甘い眠りのもとでまどろみを楽しみたいから。というのも、これまでずっとわが<sup>まぶた</sup>瞼の下の両目は閉じたことがなかつた。あなたの手にかかつて私の息子が命を落として以来、ずっとそうして私は悲嘆にくれ、無数の思い煩いを噛みしめている。家畜に餌をやる囲いの中を転がり回り汚物にまみれた。しかし、いま私は食べ物も味わい、燃えるような酒も喉に通した。これまでは少しも味わつていなかったのに。」

(同二四・六三五一六四二)

このことから、アキッレウスの説得は適切なものだったことが分かる。彼の言葉にプリアモスは最初から決して異を唱えるべきではなかった。とすれば、それだけアキッレウスの用いた二つの例話は説得性を有していたと考えられる。アキッレウスの場合、ネストールのような直接見聞ではなく、どこから聞き知った話でもミュートスの働きかけを備えている。では、その働きかけの力はどこから来るのだろうか。それは、ネストールの場合には、並外れた長生きというこの英雄に固有の特質と結びついていた。アキッレウスについても固有の性格に目を向けるのがよいと思われる。

## 5 ミュートスと英雄

アキッレウスはギリシア軍中、あるいはトロイアの地で戦う戦士の中で、もつとも武勇にすぐれる。このことは英雄の第一の特性である。が、それと並んで、彼はただ一人、これから起こるであろうことを知っている点に特色がある。

すでに見たように、アテーネー女神の諫止によつて剣を抜くのをやめ、アガ멤ノーンを罵つたときにも、自分の不在をギリシア軍が嘆くであろうこと、アガ멤ノーンが後悔するであろうことをアキッレウスは述べた。これもその一つの例である。そして、実際にアガ멤ノーンが後悔して和解の使者を送ってきたとき、使者の一人オデュッセウスの説得を拒む言葉の中でアキッレウスは言う。

「母なる女神、銀の足のテティスが私に言っている。私が最期を迎える死の定めは二通りある。もしここにどまりトロイアの都をめぐる戦うなら、私の帰国は失われるが不朽の誉れが得られよう、もし故郷へ、愛しい祖国の地へ向かうなら、私のすぐれた誉れは失われるが長生きの人生が



得られようし、すぐに最期が私にめぐってくることもなからう。」

〔イーリアス〕九・四一〇—四一六

アキッレウスは結局、トロイアでの死と不朽の誉れの道を選んだ。ために故国で年老いてゆく父ペーレウスの世話をすることができない。このことは、右に触れたように、第二四歌でのプリアモスへの言葉の中で言及されていた。

さて、こうしたアキッレウスの将来についての知識に関して、右に挙げた例ではアテーネーとテティスといずれも女神が関わりをもっている。この点で示唆に富むと思われるのは、第一歌でアガメムノーンの使いがアキッレウスのもとからブリセーイスを連れ去ったあと、英雄が母テティスに懇願する場面である。アキッレウスはそれまでの次第を語ったあと、次のように言う。

「しかし、あなたにもしその力があるのなら、自分の息子を守ってください。オリュンポスへ行き、ゼウスに嘆願してください、もしこれまでに、あなたの言葉が行為かがゼウスの心を喜ばしたことがあるというのなら。というのも、あなたが父の館の中で何度も自慢しているのを私は聞きました。あなたは言いました、黒雲を集めるクロノスの子ゼウスのために、恥辱的な破滅を、あなたが神々の中にもお一人で防いであげた、と。それは、ゼウスを他のオリュンポスの神々が縛り上げてしまおうと企んだときのこと、ヘーラーもポセイドーンもパッラス・アテーネーも仲間でした。しかし、あなただけがゼウスのもとに駆けつけた。女神よ、あなたが縛った縄を解いたので。あなたは急いで百手の怪物をそびえ立つオリュンポスに呼んでおきました。それはプリアレオースと神々に呼ばれ、人間はみなアイガイオーンと呼んでいる怪物で、腕力は父親の神よりもまだ強い。

これがクロノスの子ゼウスの横に腰を据えて居丈高に構えると、至福なる神々もさすがに怖気づいてゼウスを縛ることはなかった。さあいま、そのことをゼウスに思い起こさせてください。そばに座り、膝にすがって嘆願してください。」  
 (同一・三九三—四〇七)

アキッレウスはここで、自分の誓言が成就するように、つまり、アガメムノーンに自分への侮辱を後悔させるため、自分の不在がギリシア軍に災いとなるような事態をゼウスが実現してくれるように願い、その願いを母テティスならゼウスに聞き届けさせる力があるはずだと言う。言及される百手の怪物の話はその言い分の根拠となっており、一種の例話と見ることができ<sup>6)</sup>る。

この例話の場合、これを直接体験として知っているのは、話しているアキッレウスではなく、聞き手の側のテティスであるという点で、ネストールの例話の場合とは立場の逆転が認められる。このことは二つの面で興味深い。まず一つは、立場の逆転が例話をより効果的にしていることである。というのも、テティスは、ほかでもない自分自身の経験を根拠に説得されているからである。自分を証人とされたテティスにとつて、これ以上に確かさを認めざるをえない根拠はない。もう一つは、この直接体験をし、それをアキッレウスに語って聞かせたテティスが女神だということである。人間なら、自分の体験であっても、話の中に遺漏や誤りが入り込むかもしれない。しかし、女神が話すことには、そのような落ち度はない。そこで、アキッレウスが女神から聞いたとおりにいま語ったとすれば、それだけで、仮にこれがテティス自身の経験でなかったとしても、十分に権威のある話ということになる。

こうして、ここでの例話は、アキッレウス自身<sup>7)</sup>が直接には知らないことを引き合いにしながら英雄に二つの面から説得力を与えているが、この二つのことは、先に述べた「想起」ということと関連するよ

うに思われる。

まず、「想起」は、自分自身が過去を思い出すだけでなく、話自体は知っている聞き手に物語の中の現在に必要な要素を想起起こさせることを意味した。まさにこの二番目の意味の想起を、アキッレウスは母に対して促している。そして、同じ想起をさらにテティスがゼウスに対して喚起するよう、アキッレウスは頼んでいる。アキッレウスは「想起」の効用を実によく心得ているように見える。

また、想起された直接経験が説得を権威づけるのに対し、その裏返しの関係で、歌人は自分が知りえないことについてムーサ女神から教わり、その加護によって権威を保証されるということに触れた。アキッレウスの場合も、テティスという女神が彼に例話を話し、それが説得力の源をなしている。

そこで、アキッレウスの例話は、自身の直接経験にはもとづいていないけれども、聞き手の想起に強く働きかけ、その想起が確かであることの裏づけを女神から与えられている、と言える。このように見るとき、例話に関するかぎり、アキッレウスには歌人あるいは詩人と共通する性格が備わっていることが分かる。実際のところ、次章に見るように、第九歌で英雄は歌によって自身の心を楽しませる姿を示し、そのことは、プルタルコスによれば、実に英雄にふさわしいこととされる。昔の英雄の功業を想起起こすことよって、戦いへ向かう気持ちを高揚させるからである。ミュートス、例話、歌——これらは、アキッレウスのような英雄において、想起という接点により一つに連なっているように思われる。

## 6 ミュートスと歌人

『オデュッセイア』第八歌には、デーモドコスという歌人が宮廷の歓待の場で余興に歌う場面が語ら

れている。一曲目には「オデュッセウスとアキッレウスの諍い」(「オデュッセイア」八・七五—八二、次に「アレウスとアプロディーテーとの情事」(同八・二六七—三六六)、そして最後の三曲目が「木馬」(同八・五〇〇—五二〇)であり、とりわけ、第一曲と第三曲の物語は、その場で聞いている英雄オデュッセウスの直接体験であった。デーモドコスは、自分の歌を目の前で聞いているのが当事者のオデュッセウスであることを(うすうす気づいているかもしれないが、はっきりとは)知らない。また歌人は、当事者の誰かからではなく、ムーサ女神から物語を教えられた。これらの点に違いはあるものの、当事者が聞く側となり、語る側は女神から話を聞き知ったという関係は、テティスへのアキッレウスの例話の場合と似通っている。第一曲を聞いての思いを、オデュッセウスは、

「実に、ゼウスの娘なるムーサかアポッロンであろう、おまえに教えを垂れたのは。おまえはまこと一糸乱れぬ仕立てでアカイア軍の運命を歌うのだから。おまえの歌うアカイア軍が仕遂げたかぎり、耐え忍び、苦汁を嘗めたかぎりのことは、まるでおまえ自身がその場にいたか、その場の他の誰かから聞いたかのようなだ。」

(同八・四八八—四九二)

と言う。ギリシア軍が受けた苦難を想い起こしたのか、一曲目の口演のあいだ、英雄は涙をこらえきれず、何度も衣を頭にかぶってまわりのパイアーケス人に見られないようにした。第三曲のあとでも、

身も消え入るばかりに涙が臉の下の頬を濡らした。まるで愛しい夫の上に身を投げ出して泣いている妻のよう。夫は自分の国と民の前で倒れた。町と子らから過酷な運命の日を防ごうとしたのだ。死が近づき息もままならぬ夫を目にして、妻はすがりついて悲嘆の叫びを響かせる。しかし、

敵兵たちは、うしろから槍で背中と肩を突いて、奴隷の暮らしへと連れ去つてゆく。そこには苦しみと悲しみが待つている。彼女の頬は哀れきわまる苦悶にやつれ果てる。そのようにオデュッセウスは哀れみの涙を眉の下からこぼした。

(同八・五二二—五三二)

トロイア陥落という自分たちの勝利の段を聞いてこぼれる英雄の涙が何を意味するのか、すぐには了解しにくい。が、デーモドコスの歌にそれだけ英雄の心に訴える力があつたことは疑いない。それは、オデュッセウスが自分で思い出すという以上に、歌人の物語が英雄の過去の経験を生々しく想起させたからだと言つてよいと思われる。実際、デーモドコスは出来事をただ羅列して語つていてのではなく、想起されるべきポイントを選択的に歌つている。オデュッセウスは、彼に歌を所望したとき、次のように言つた。

「だが、さあ、別の曲に移つてくれ。木馬仕立ての段を歌つてくれ。木馬を作つたのはアテーネー女神の加護を得たエペイオスだが、策略として城内へ運び入れたのはオデュッセウスで、腹中を満たした将兵たちがイーリオスを攻め落としたのだ。」

(同八・四九二—四九五)

この言葉に愚直に従えば、歌は、木馬が作られるところから、あるいは、ギリシア軍によつて砂浜に置き去りにされた木馬をトロイア人が見つけたところから、始めてもよかつたであろう。ところが、

彼の選んだ歌い出しは、他のアルゴス勢が見事な漕座の船に乗り込んで出発し、陣営に火を放つていった一方で、誉れ高いオデュッセウス率いる一隊が、すでにトロイア人の集まる広場の中に待ち構え、木馬に身を潜めているところからであつた。「中略」それというのも、トロイア滅亡と運命

が定めた日は、都の奥深く巨大な木馬が入り込むときだったから。木馬の中にはアルゴス勢の精銳が揃って待ち構え、トロイア人らに流血と破滅をもたらそうとしていた。

(同八・五〇〇—五〇三、五一—五二二)

ここに見るように、デーモドコスの歌は木馬がすでに城内に入ったところから始まり、このときをトロイアの命運の決した瞬間として強調する。これによって木馬とトロイア陥落とが分かちがたい一つの出来事として語られ、木馬は人間が編み出した策略というより、人間には抗しがたい運命の力の象徴という意味合いを帯びる。オデュッセウスは、自分の案じた計略ではありながら、そこに働いていた運命をあらためて想い起こさせられているように思われる。右に引いたこのときの英雄の泣き方はこの点を暗示しているかもしれない。オデュッセウスは陥落後のトロイア女のように泣いている。その姿は運命に翻弄される人間の哀れを示しているが、悲運はトロイア側だけに降りかかったのではない。ギリシア軍中随一の英雄アキッレウスはトロイア陥落を前に戦場に倒れた。無双の勇士アイアースは、アキッレウスの武具の所有権をめぐるほかならぬオデュッセウスと争い、これに敗れて、トロイアの地で自殺した。総大将アガメムノーンは、故国ミュケナイに帰還を果たしながら、妻クリュタイムネーストラーによって謀殺された。これらの戦友たちの悲運を、オデュッセウスは冥界に降ったときに、当人たちに逢って実感している。そもそもオデュッセウス自身が、トロイア陥落からすでに十年ものあいだ漂泊を続け、すべてを失ったいま、まだ異国の地にいる。冥界降りも含め、そうした現在も続く苦難を、第九歌から第一二歌で、英雄はバイアアース人たちの前で披露する。彼ほど運命の過酷さをわが身に沁みて感じている者はないであろう。

さて、このようにデーモドコスの歌がオデュッセウスに、いまも身をもって味わっている人間の悲運を想い起こさせたとすれば、これは、先にアキッレウスについて見たミュートス、例話、歌の関連をより密接に指示するように思われる。そして、この関連において想起の働きの重要性にあらためて注視する必要があることを、この章の結びとして記しておきたい。

〔注〕

- (1) ヒッポケンタウロスはケンタウロスに同じ。キマイラは頭が獅子、胴が山羊、尾が蛇で、口から火を吐くとされる怪物。
- (2) キケロー『法律について』一・三一―四参照。
- (3) 『イーリアス』一五・三八三、『オデュッセイア』一・五六、『ヘルメース讃歌』三二七。
- (4) 以下、ミュートスの「権威」に関する議論については、Martin, R. P., *The Language of Heroes, Ithaca and London, 1989* に負うところが大きい。
- (5) ネストールの場合、すでに引用した箇所以外では、一一・六五六―八〇三、一三三・六二六―六五〇、また、アガメムノン(四・三七〇―四〇〇)、ポイニクス(九・四三四―四九五)、さらに神々でも、ディオオーネー(五・三八二―四〇二)、ヘーバイストス(一八・三九四―四〇五)などの例が見られる。
- (6) ちなみに、神々の王ゼウスの危機を百手の怪物が救うという話はよく知られており、代表的な話形はヘーシオドス『神統記』に語られるところである。しかし、ゼウスへの反乱を起こしたのがオリュンポスの神々、それもヘーラー、ポセイドーン、アテーナーといった主要な神々であった、あるいは、その中でテティス一人がゼウスの側に立ったという伝承は、ほかには見られない。
- (7) 第Ⅱ部第2章第2節2の「歌人と英雄」の項参照。